

編集後記

近年、大学間、教員間で質の高い研究・教育機会の提供を競い合うことが求められ、大学教育改革の必要性が叫ばれている。本号で取り上げている自校教育やFD活動に関心が集まっている背景には、こうした要請の高まりと無関係ではないだろう。

自校教育に関連した授業を行っている大学は60校近くにのぼるといふ。それだけ多くの大学に関心を寄せているわけであるが、そのねらい・目的はさまざまである。私自身、自校教育の目的は、自校に対するアイデンティティや愛着心の涵養ではないかという漠然としたイメージを抱いていた。だからこそ、殊更授業として行うまでもなく、ガイダンスやゼミ（特に初年度の）などで折に触れやっておけばいいという程度にしか考えてこなかった。こうした見方に対し、シンポジウム報告者の京都大学西山氏は、真っ向から異を唱えている。自校の歴史学習を通じて批判精神を持った、自身で物事を考える姿勢を身につけていくことの重要性を強調していた。氏の歴史教育のスタンスは、まさに全カリの教育理念そのものといえるだろう。

恥ずかしながら、本稿を執筆するに当たり、初めて『立教大学の歴史』（立教学院史資料センター編）を読んでみた。そこで感じたことは、自校の歴史をこうした視点で捉え直すことは、実は学生というよりは私たち教職員にとって意味のあることではないかということであった。たとえば、同書の134～139頁には、1942年に立教学院寄附行為が変更され、基督教主義的色彩を払拭するだけでなく、「皇国ノ道」という表現が採り入れられ、天皇のための教育を行う教育機関になったという下りがある。軍国主義体制において、やむを得ない判断だったという同情的な見方もできようが、他方で、同じミッション系大学の関西学院や上智学院は、戦時下を通じて同様の対応をとることはなかったことが記されている。自校の歴史を批判的精神から振り返ることで、私は、今日のめまぐるしい時代の潮流にあるからこそ、時流に流されない確固たる信念と、少数派の意見にも耳を傾けられる寛容さが必要なのではないかということを感じ取った次第である。

同様に、FD活動についても、それ自体は有意義なことに間違いはないだろうが、なぜ、何のために導入するかが教職員の間に共有されていないと、やらされ仕事が増えるだけという結果にもなりかねない。個々の教員が相互に授業を開放しあい、互いに学びあおうとする自発性こそが重要なのであり、そのための環境をいかに整えるという視点から大学教育改革は捉えられるべきではないだろうか。リベラル・アーツを充実させるには、誤解を恐れずに言えば「遊び・余裕」が必要である。授業改善のためのさまざまな試行錯誤や教員・学生との語り合い・学び合いから、多くの気づきを得られるのである。単に「バスに乗り遅れるな」という動機に基づく上からの改革では、形式要件に翻弄されかねない。

やや批判めいてしまったが、大学教育改革が声高に叫ばれている今だからこそ、周りの動向に流されることなく、全カリの全カリらしさを追求することの重要性を改めて感じた。

原田 晃樹（はらだ こうき）
本学コミュニティ福祉学部准教授
全学共通カリキュラム運営センター
教育研究・広報委員